

(07.11.25)

三学会合同「プラズマ宇宙物理」セッション

高部英明

(本原稿は阪大レーザー研の所外広報誌の記事として依頼され書いたものである 071125)

「学会の数が多すぎる」と思いませんか。20世紀の科学の進歩・深化は専門に分化した学会・協会を多数創設させた。学会同士が魅力的になるよう切磋琢磨することは良いことだが、果たして大学院生など学会事情を知らない若手に本当によいことだろうか。私は学生が先生の所属する学会の世界しか見ることができないのは悲劇であると感じている。

特に私の専門である「プラズマ物理学」は工業応用から宇宙物理まで極めて学際的な世界であり、国内でも8学会ほどがプラズマ物理関連のセッションを開催している。そこで、物理学会(会員数約2万人)の領域2「プラズマ物理学」が中心となり、日本天文学会、地球電磁気惑星圏学会と「プラズマ宇宙物理」の切り口で3学会合同のセッションを開催することで合意した。3年前、各学会理事会の承認を受け、05年春の物理学会、06年5月の地球惑星連合学会、07年秋の天文学会と学会回り持ちで3学会から推薦されたプログラム委員で企画し、開催してきた。

この企画は大変好評で、物理学会では「自分の実験が宇宙プラズマとどう関係するか」と果敢にセッションに加わり視野を広げる方が多数いた。発表件数もこのセッションだけで200件にもなり、パラレルとせざるを得なかった。同じような研究をしているのにそれが実験室かスペースか宇宙かの違いで今まで顔を合わせたことのない研究者が日本に多数いることがわかり勇気がわいてきた。06年の試みは10ほどのテーマに対し、講義形式を充実させてくださり、大変勉強になった。私の視野が確実に広がったことを実感した。同時に、地学系の60もの学会・協会が共同主催している学会連合講演会に初めて参加し、その企画や今日に至る経緯なども実行委員長に聞かせていただき、大いに参考になった。

一回りして次はどうか天文学会の際に議論した。継続を希望する意見が大多数であった。同時に、この試みをプラズマ物理全体に広げようと「プラズマ科学学会連合講演会」の提案も出され、現在、関連学会で協議中である。このような講演会が年に一度もたれるならば、レーザー・プラズマ実験の発表で学会デビュー果たすレーザー研のM1学生は、この講演会の宇宙プラズマから基礎、応用プラズマまで学際的な雰囲気の中、シリーズ講義を聴くだけで「自分はプラズマ物理学という深く広い学術世界の扉を開いて今から入っていくんだ」と興奮するに違いない。学会運営に携わる私たちの世代の仲間が「自分に得か損かではなく、次の世代が世界に羽ばたくために、どのような学術会合を用意してやらなければならないか」の視点で連携した講演会を設立していこうと話している。